

文化の自律性の問題

——唯物史觀的立場、社會學史觀的立場を通じて見たる一考察——

河 野 吉 男

はしがき

この小文は廣義の意味に於ての文化が種々なる歴史觀に於て如何なる取扱ひをなされつゝあるかを考察せんとするものである。この際文化なるものが何を意味するかは、一應問題とせらるべきものと思ふが、それは、この考察の範圍外に互る問題なので、詳細なる論述は略し、只この際は、アルフレッド・ウエーバーの所謂文明と嚴別（註一）せられた所の文化よりも一層廣い意味に解釋して、我々の存在——客觀的契機としての——に何等かの意味——主觀的契機——を結合せんとする意識的努力の總稱と解しておきたい。この獨斷的な解釋が當れるや否やはしばらく措き、以上の如き意味の文化が各歴史觀に於て、それぞれ異つた取扱ひを受けつゝあるは興味ある問題と稱せらるべきであらう。筆者は以下に於て歴史觀を、唯物史觀的立場と、社會學史觀的立場の二つに大別して（註二）、その各々のものと

の關係について考察をなすこととする。

註一 アルフレッド・ウェーバーは、社會過程に於て更に文化と文明とを區別し、文化を我々の情意的所産、文明を理智的の所産と解し兩者の混同すべからざる點を力説してゐるが、この際は兩者を綜合せる廣い意味の文化として、考察することとした、なぜなら筆者の目標は文化そのものの解明ではなくして、只文化と他の史觀との關係を對象となせるに過ぎず、文化そのものの究明は、當該論述の範圍外でありたとひ之をなしても實益を伴はないと考へたからである。尙この點については Alfred Weber, Ideen zur Staat und Kultursociologie (1912—1917) S. 23 參照。

註二 兩者の區別は便宜上より問題に過ぎない、所謂精神史觀は社會學的史觀中に包含した。

一

まづ第一に唯物史觀の立場に於ては、文化は、如何なる取扱ひを受けつゝあるであらうか。唯物史觀に於て、文化に該當するものは、マルクス・エンゲルスによつて所謂上部構造とせらるるものであるが、然しマルクスもエンゲルスも、上部構造を文化なる言葉で以て呼びしことはその全著書を通じて殆んど見當らない。彼等は上部構造としての法律、政治、道德、哲學、宗教等々を、精神的所産 (geistige Produktion) ①、意識諸形態 (Bewußtseinsformen) ②、イデオロギー形態 (ideologischen Formen) ③ 等々種々なる表現法によつて呼んでゐる。よつて文化なる言葉之等の精神、意識或はイデオロギー等々の表現形態すなはちかの經濟學批判に於ける所謂

上部構造に該當するものとして論述を進めて行くであらう。

これらの上部構造としての文化は、法律政治を始め、道德、神學、科學、藝術、哲學、宗教等々、凡て我々の精神或は意識の所産と稱せらるるもののあらゆる領域を包含する極めて廣汎なものであつてこの意味に於ては、文化は所謂上部構造の全體を意味して居ると解して差支へない。しかしながら、經濟學批判序文に於ける如く④、マルクスに於てはかゝる廣義の文化——彼の言葉に於てのイデオロギー——は、更に法制上、政治上のそれと、道德、哲學、宗教等々のそれとに分割せられて法制上、政治上の文化に對し、道德、哲學、宗教、藝術等々は下部構造に對しては一層間接的な——それだけ輕蔑的な——文化として取扱はれてゐるのである。しかるに以上の如く廣狹二義に區別せらるる文化も、唯物史觀の大系中に於ては殆んど存在の價值すら認められず、極めて輕蔑的な取扱ひをうけてゐる事實はかのドイツ・チエ・イデオロギーの本文中に使用せらるる幾多の文句によつても歴々として指摘せらるる所である。

彼らドイツ・チエ・イデオロギーに於てドイツ人が「純粹精神」の領域にさまよひ、宗教的幻想を以て歴史の推進力となしてゐる點を最も非現實的なものとなし、かゝる思想家たち「哲學者たち」「イデオロギー」達を歴史の製造者となす獨逸觀念論の立場を、ラインのこなたのイ

デオロギー——すなはちフランスの哲學と比類しつゝこれをドイツの外部に横はる一つの立場より觀察するの必要を力説した^⑥。この點に彼の所謂ドイツイデオロギーすなはちイデオロギーの獨逸的のものの批判の動機が横はるのであるが、その全文中に於けるイデオロギーの批判は、獨逸觀念論に於ける非現實性、空想性を指摘せんとするにあつた。而して文化としてのイデオロギーは、マルクスに於ては何等體系化されては居らず、且又その範圍に於ても極めて錯雜し、只その存在への依存性を衝くに急にして、イデオロギーそれ自體の究明は、殆んど問題となされてはゐない。只注意すべき點は今日の意味のイデオロギーは、ドイツのイデオロギーなる限定的範圍をこへて更に、總體的イデオロギー或はイデオロギー一般を意味して居る點である。しかし、その内容自體の解釋は、エンゲルス以下の唯物史觀論者に於ても殆んど變らないことは、例へばエンゲルスの一八七八年より一八八八年に至る著書及び一八九〇年より一八九四年に亙る、唯物史觀に關する四つの手紙に於て明らかに見らるのであつて、彼に於ては唯物史觀に於ける觀念の役割を認めながらも、尙經濟も以て窮極的決定要素となし、上部構造としてのイデオロギー體系すなはち今日の意味に於ける文化は、結局に於ては下部構造に依存せるものとせられてゐる。「この際に於ける文化は、マルクスに於けると同様、思想的な觀念、或は現實鬭爭者の腦裏に於ける反射^⑦等々

の極めて、非現實的な、反映的な意義を認めらるるに過ぎない。勿論エンゲルスに於ても一應觀念の存在を肯定し、これが下部構造への反作用を認めてはゐるが、然し、結局は「窮極に於て自己を遂行する所の經濟に制約され、この意味に於ては文化も何等自己制約性或は自律性は有してはゐないのである。この點に於ては、唯物史觀を祖述する他の人々に於ても依然として同様である。例へば、クノーに於ては、イデオロギーは「窮極原因の作用系列中の獨立ならざる介在物」⑧ (unselbständiger Zwischenglieder in der Wirkungsreihe dieser letzter Ursachen 又は經濟への因果的介在物)⑨ (Zwischenkausalglieder) として、僅かに中間要素的地位を認められ、ブハーリンに於ても、思想感情又は行爲準則の體系としての社會的イデオロギーは、社會的現象の連鎖中の必要なる一環 (notwendiges Glied in der Kette der gesellschaftlichen Erscheinungen) として認めらるるに過ぎないのである。マルクスによつて用ひられた所のイデオロギー形態すなはち文化に對する言葉にかくさるる蔑視的、排撃的な暗黙の感情は一貫して唯物史觀論者の凡ての胸裏に貫徹するものであり、而して唯物史觀論者は、イデオロギー形態の存在を認むるにせよ、或は認めざるにせよ、結局は經濟關係を基點とする觀念形態の説明をなすことによつて、マルクスの傳統を把持しえたるものとなしてゐるのである。故に彼等に於ては、上部構造としての諸觀念形態、すなはち廣義の意味に於ての文化は、何等その自己

制約性或は自律性は認められず、高々下部構造への附隨的存在を許容さるるに過ぎない。唯物史觀の一元的垂直的説明に於て、我々の存在と意味との結合すなはち、主觀的契機と客觀的契機との結合としての文化は、單に第二義的の意味を有するに過ぎざる以上、文化それ自體についての體系化、或はその立場の究明の全然無視さるるに至つたのは止むをえざる所と稱すべきであらう。

- 註① Karl Marx, *Der Dialektische Materialismus*. 2. Bd. 1962. herausg. S. Landhat und J. P. Mayer. S. 12
- ② derselbe, S. 13.
- ③ Karl Marx, *zur Kritik der Politischen Ökonomie*. 1930 S. 5.
- ④ derselbe, S. 5
- ⑤ 佐野文夫譯、ドイツ・イデオロギイ(岩波文庫)、四一頁、八八頁參照。
- ⑥ マルクス・エンゲルス全集二十一卷三五六頁、フロツホ宛の手紙參照。
- ⑦ 同前二十二卷二六五頁、メーリング宛の手紙參照。
- ⑧ Cunow. *Die Marxsche Geschichte, Gesellschaft und Staatlehre*. Bd. II. 1921. S. 255.
- ⑨ derselbe, S. 255
- ⑩ N. Bu harin, *Theorie des historischen Materialismus*. 1922. S. 260.

二

以上の如き唯物史觀論者の文化への態度に對し、歴史を社會學的視野より眺めんとする論者に於ては文化は果して如何に觀察されつゝあるであらうか。社會學的史觀に立つ代表的のものは高田博士及びマクス・アドラーの兩者に於て見出さる。而しながら兩者共に同様の社會學的史觀を主張せんとするものではなく、高田博士に於ては人口學的立場を原動力とする純粹關係のそれであり、アドラーは社會化する人間を中心とする精神的史觀であることは注目せらるべき點である。すなはち唯物史觀に於ける下部構造としての經濟關係を前者に於ては社會關係としての純粹關係を代置することによつて、經濟的要素をこれより全然排除し、この基點に於て、文化の成立の地盤を説明せんとするに對し、後者に於ては、經濟關係をそのまゝ認めながらもこれを社會化の立場より觀察し、イデオロギーとしての文化と、社會現象としての經濟關係との區別を同一社會現象の異なる段階にすぎざるものとして解釋せんとするのである。これを換言すれば、高田博士に於ては、下部構造に於ける經濟關係と社會關係としての純粹關係との二者擇一的の交替であり、上部構造中に屬するものとして追ひやられし經濟關係に、純粹關係を代置せるものであり、アドラーに於ては經濟關係をそのまゝ下部構造中に認めながらも、これを更に精神化し、社會化し、これによつてえられた所の社會現象なる外被を着けた經濟關係がイデオロギーとしての文化成立

の出發點となされてゐるのである。嚴密な意味に於ては、唯物史觀の基本關係とせらるる所の經濟關係への把握の仕方を異にしてはゐるが、しかし經濟關係に代ゆるに何等かの仕方にて社會關係を代置せんとした點は兩者に共通せるものと稱すべきであらう。

まづ高田博士に於て所謂上部構造としての文化と、社會關係との關係を見やう。

博士に於ては唯物史觀の樞軸をなす生産關係がしばしば“*Das Materiale*”の名前を以て呼ばるるにかゝはらず、これを物質的のものとなすに極力反對し①、生産關係は、人と人との關係又は結合を示すものとせられてゐる。② マルクスがしばしば使用せる社會或は市民社會、或は經濟的構造等の言葉は結局に於て人と人との結合關係に歸一せらるるのである。すなはち博士に於ては、マルクスの所謂生産關係中より、經濟なる要素を切斷し、これを純社會學的のものと解し、切り離されたる經濟を上部構造とすることによつて唯物史觀中に於ける經濟の決定者的地位が被決定者のそれに變化せしめらるるのである。③ 而して上述の如き經濟を排除したる人と人との結合關係は、博士によればイデオロギーでもなく、且又生産に於て人々の入りこむ所の關係でもなき所の「純粹關係」と稱せらるる。④ しかもこの純粹關係は、その原動力としての人口の量質的組立によつて變動せしめられ、これによりて我々の上部構造としてのあらゆる文化の變動が制約せられてゐるのである。⑤ ⑥ これ博士

の史觀が一に人口的史觀或は第三史觀——第一史觀としての精神史觀、第二史觀としての唯物史觀に對して——と稱せらるる所以である。

その人口的史觀は結局の所マルクスの生産關係、經濟關係を中心とする、生産力に替ゆるに純粹關係——人口の量質的組立を以てしたものである。

しからば以上の如き人口の量質的組立によりて變動せしめらるる純粹關係と精神的所産としての文化との關係はどうであらうか。博士によればこの場合社會的關係と、精神的文化との關係に於ては、觀念的事象に於ける形式、内容、及びこの兩者を結合した方向又は定型の三つの方面より考察せられてゐるのであるが、しかし社會的關係が精神的文化に對する關係はその定型を指示することに於て決定的勢力を有し、窮極に於ては、社會的關係を決定的要素となすべきものとせられてゐる^⑥。もとより、上述の如き精神的文化が、社會關係及びこれを通じて人口の量質的組立に反作用を及ぼすことは博士に於ても看過せられてはゐない。がしかし、社會的關係に對する上部構造のかゝる反作用著しきにも拘らず、尙社會的關係を以て社會的變化の基本なりとせられてゐるのである^⑦。

こゝに於て我々は高田博士の第三史觀の場合に於ても尙文化の存在は、唯物史觀の場合に於けると同様に、人口の量質的組立及び之によりて變動せしめらるる社會關係としての

純粹關係に依存的のものなることを知るのである。すなはち博士に於ては社會的關係、人口の量質的組立によりて決定せらるるが、政治的、法律的構造を作り、他方に於ては經濟と觀念とを決定するのである。只此場合問題は、博士の所謂純粹關係と精神的文化、博士の言葉によるとの關係である。博士によれば兩者は決定者——被決定者の關係にあるものとせらるるも、博士に於ける純粹關係についての説明を以てしては、その精神的文化への手がかりに於て尙不充分なる所なしとしない。試みに博士の純粹關係の説明を摘記してみやう。

「純粹關係は所謂イデオロギー關係ではない、人間の意識を通過せずして形成せらるる意味に於て(傍點河野)若くはイデオロギーを仲介とせず、内容とせざる意味に於て等しく物質的關係と呼ばれうる。只それが生産關係と異なる所は人々がその中に生産に於て入りこむのではない點である。」⁽⁸⁾

すなはち純粹關係は生産關係と異なる物質的關係であつて、しかも我々の意識を通過して形成せられた所のものではない。つまり意識と無縁に形成せるものである。これを別言すれば意識的(俗も博士の所謂人口の量質的關係が社會關係に對して社會的(俗も博士の所謂人口の量質的關係が社會關係に對して社會的)のものと稱しえやう。博士の上述の純粹關係と精神文化との關係を意識に關する點を中心として書き直して見ると次の様にもなる。

被決定者 決定者

精神文化 ↑ 純粹關係(は次の如くに翻譯せらるる)

意識の所産 ↑ 意識前的(又は意識無關係的)

結局に於て意識に無縁なる意識前的なるものが意識を通して創作される文化を決定することとなるのである。我々はこの點に於て人口的史觀の上部構造と下部構造との關係に於ける博士の説明の不充分さを看過しえない。しかしこの點の論述は尙別の機會に博士の教示を乞ふこととして、人口學的史觀に於ても尙文化は下部構造としての社會的關係によりて決定せらるるものと解せられる點に於て尙その内容に依存性が包含せられるのである。最も博士に於ては精神的文化は下部構造としての社會的關係すなはち純粹關係の產出せるものとは解せられず只兩者の内容上の相關關係の程度の承認に止まるとは云へ尙文化の自律性、自己決定性の余地は與へられてゐないものと解すべきである。

しかるに、同じく社會學的史觀の立場にありながら、文化の自律性を認むるが如く見らるるものにマクスアードラーがある。アードラーに於ては、生産關係は人と人との精神的結合關係であり、經濟關係それ自體が一つの精神關係に歸納せらるる^⑨。故に彼に於ては純物質的な經濟的關係と、純精神的關係なるイデオロギーとを對立せしむるが如きは唯物史觀

の大なる誤解となされてゐるのである^⑩。更に彼に於ては生産關係の社會化或は精神化のみならず、生産力の中心をなす技術それ自體が、一つの精神化を経験するものとすらせられてゐる。すなはち彼によれば技術——經濟關係——イデオロギーの一聯の連絡は「活動的な諸計畫及び諸理念によつて行動する人間」或は「社會化せる人間」によつて一大動脈として貫徹せられてゐるのである^⑪。これ下部構造に於ける歴史發展の原動力としての技術より、經濟關係を経て、上部構造としてのイデオロギーに至る迄、徹底的に精神化の行はるる所以である。故に、彼に於ては技術と經濟關係との關係は統一化せるものとなり、兩者は二個の別種のものに非ずして、かへつて「同一精神過程の二面」(zwei Seiten eines und derselben Prozesses)なりと解せられ、その異れるは只觀察の相違なりとせらるるに至つてゐるのである^⑫。これ恰も、イデオロギーと經濟との關係が、同一なる精神的關係の二つの異なる段階とせらるることと相照應してゐる。

上述の如き意味に於て精神化せらるる彼の社會學史觀に於て、イデオロギーとしての文化は果して如何に考察せられてゐるであらうか。彼は唯物史觀が「窮極に於て」經濟の決定的要素なりとせることを極めて「遍倚性」(Einsichtigkeit)なるものとする、マクス・ウェーバー、エーレンス・トール・エルチの非難を排し、これを社會過程の因果的説明の爲の確固たる根本方向

づけ(Grundorientierung)を提供し、且又社會生活の現實的因果理論を可能ならしむるものと解して、^⑭經濟の窮極的決定要素たることを肯定せんとしてゐる。すなはち唯物史觀は精神の作用を充分に肯定し、社會過程の根本的方向づけとしての經濟なる軌道を走りつゝ、その上に蒸氣機關としての精神の活躍を認めんとしてゐるのである^⑮。この點は彼のつぎの言葉によつても伺ひえられやう。

「唯物史觀は精神の作用をも社會的因果の問題(*gesellschaftliches Kausalproblem*)と見做し、根本にある經濟的關係に基きつゝも、——その内に觀念も表れてくるのであるが、——これを(精神を)縮小せんとする所ではなく、かへつてその増大、その活動可能性、その社會的領域を明らかにせんと努めてゐるのである^⑯。」

故にアドラーに於ては、經濟なる根本方向の軌道に沿ふ範圍内に於て、精神なるものゝ活動が承認されてゐるものと稱してよい。しかしながらこの際あく迄も注意すべきは、軌道としての經濟の存在、及びこの軌道を脱線せる時は精神的活動もその機能を果しえないものとせられてゐる點である。この點に於て、イデオロギーは經濟關係と同一精神現象の異なつた段階ではありながらも、尙下部構造としての經濟關係又は人と人との社會的關係に規定せられてゐるものと稱すべきであらう。すなはちアドラーに於ても精神文化として

のイデオロギーの最大可能の活動を許容せんとするが如くではありながらも、尙、その規定的要素としての——彼の所謂軌道(Celeste)としての——經濟を窮極的のものとなしてゐるのである。最も經濟なるものが彼に於ては極めて特異なる精神化、社會化をなされてはゐるものの、尙、文化としてのイデオロギーが被決定者たる點に於ては變化はない。この點に於て、社會學的史觀に於てすらも文化に與へらるる自律性又は自己決定性は極めて貧弱なるものと見るべきであらう。唯物史觀の經濟的要素を何等かの方法によりて排除せんとする社會學的史觀は、それ丈唯物史觀の多大なる修正を意味するものである。しかるにも拘らず上部構造としてのイデオロギー或は文化領域に對する解釋の態度は、唯物史觀と大差あるを見出し難い。唯、物、史、觀に於ては下部構造としての生産關係又は經濟關係に於て、社會學的史觀に於ては下部構造に於ける人と人との純粹關係又は精神關係に於て、その社會發展の原動力を見出さんとし、精神的產物としての文化は、これに對する附隨的立場に於てのみその存在理由を與へらるる點に於て共通してゐるものと稱すべきであらう。しかばイデオロギーの諸形態すなはち各種の文化領域は全然その自律性又は自己決定性を有しえざるものであらうか。我々はこの點についての論述をエミール・レーデラーの「文化社會學の問題」に於て見出すのである。我々はつぎにレーデラーの言葉を聞かう。

- 註① 高田保馬博士、階級及第三史觀、二六九頁。
- ② 前掲 二六九頁、高田博士、生産力の自己運動（經濟論叢第三十六卷五號三二頁）參照。
- ③ 前掲、階級及第三史觀、三四一頁。
- ④ 前掲 生産力の自己運動（經濟論叢前掲三三頁）。
- ⑤ 前掲、階級及第三史觀、二九九頁、三三三頁、三四一頁、其他參照。
- ⑥ 前掲 三四頁—三二五頁。
- ⑦ 前掲 三二一頁。
- ⑧ 前掲 生産力の自己運動（經濟論叢前掲、三三頁）。
- ⑨ Max Adler, Lehrbuch der materialistischen Geschichtsauffassung, Bd. II. 1932. S. 55.
- ⑩ 商業と經濟、第十三年第一冊、拙稿マクス・アドラーと唯物史觀、二一八頁。
- ⑪ Max Adler, derselbe, S. 22.
- ⑫ derselbe, S. 54.
- ⑬ derselbe, S. 25.
- ⑭ derselbe, S. 87.
- ⑮ derselbe, S. 28.

三

エミール・レーデラーに於ても文化は、生産關係によりて説明せらるるものとなす點に於

ては、唯物史觀と相照應するものがある。しかしながら、彼の所謂社會學的觀察 (soziologische Betrachtung) に於ては、生産關係は經濟的技術的の意味のみならず社會的習俗 (sozialen Habitus) をも包含する點に於て極めて廣汎に解釋せられてゐるのである^①。社會的習俗は人間又は人間關係を包含してゐる所の一の精神的態度を意味する。この點に於て彼の意味する生産關係は、前述のアドラーの場合と全然同様に、精神的要素をも包含せるものであり、唯物史觀の場合に於けるが如く、單に經濟的物質的のものに過ぎざるものとは異なることを知りうるであらう。

しかしながらレーデラーに於ては、文化と社會關係との關係は、前述の社會學的史觀に於けるとは全く異なり、社會的關係は、文化に對して只單に素材或は條件を提供するのみにして文化それ自體は一の自律性 (Autonomie) を有するものとせられてゐるのである^②。彼は、この點に關して、法律及び藝術について詳細に論述し、文化としての法律及び藝術それ自體、の領域内に於ける課題と、法律及び藝術についての社會學的觀察のそれとは全然その種類を異にしてゐる所以を論ぜんとしてゐる。例へば文化としての法律それ自體の領域に於て問題とせらるる所は法律をその法源より、統一的の矛盾なき思惟體系としての法律的範疇に於てこれを構成することであり、しかもこれをなしえんが爲には、あらゆる法源を統一

的意志をもてる立法者に歸着せしむる要がある。而して、その際第一の問題となるのは、あらゆる種類の現象形態を示す法律體系が、本源的に立案された所の法律體系の、更により一層進歩したる表現又は形態として、一體どの程度に迄把握せらるるかが問題となるのである。しかるにこれに反して、法律の社會學的觀察の問題とする所は、法律の指導概念が、社會的基礎より一體説明せられうるものであらうか。もし可能ならばどの程度に迄行ひうるか、或は經濟的性質の體系と廣狹いづれの意味に於てか關係する所の——この社會的基礎が、一の法律體系を要請するものなるや否やが問題となる③。かくして法律それ自體の領域の課題と、これが社會學的觀察の課題は全くその類を異にするに至るのである。彼は更に藝術(Kunst)の領域に於ても同様の區別あることを論じて、藝術の領域内の課題と、これが社會學的觀察のそれとの區別すべき所以を詳述してゐる。藝術それ自體の問題とする所のもので、藝術史以外の立場及びその社會學的觀察にとつては解決しえざる所の問題は、例へば様式(Stil)の發展その相互の繼起及び進展が、內在的に發展する技術より如何にして誘出しうるか、或は又それは抽象的模倣的樣式に照應する所の藝術的體驗の二つの根本型式や、しばしば兩極的の可能性を呈示し、その内に於て實現化の、無限の内容が埋藏されてゐる所の、かの線的(lineare)及び繪畫的(malerische)の二つの觀照方法を果して受容しうるかどうかどう

かの問題の如きである。これらの課題の凡ては社會學的觀察が、それ自體だけでは何等手出しをなさない所のものである。藝術史のそれに對して、社會學的問題設定は、只一時代の社會的構造より、藝術或は様式が如何にして理解さるるか——しかもそれは審美的な意味 (ästhetischen Sinne) に於てではなくその形態の解明への寄與としての意味に於てである。——が問題となつてくるのみである。故に藝術の社會學的觀察は、それ自體としての藝術作品の本質 (Wesen) を明らかにすることは不可能の事と稱すべきであらう④。この際上部構造としてのイデオロギー概念は、藝術的活動の自律性 (Autonomie der künstlerischen Leistung) の維持せらるる様形成さるべきであつて、社會的基礎の全體は、單に素材 (Material) 或は條件 (Bedingung) として作用するに過ぎざるものとせられてゐるのである⑥。同様のことは演劇に於てもこれを稱しうる。演劇の社會的觀察は、演劇の形態に於てもその審美的價値の實現の可能性を云爲しうるのみであつて、それ自體を説明しえない⑥。すなはちその本質の解明は社會學的觀察には無縁のものなることを知りうる。

これを要するに文化の社會學的解釋は、レーデラーに於ては高田博士或はアドラーのそれに於けるとは異なり、上部構造としての文化それ自體の本質に迄干渉しないこと、及びこの限界に於て文化それ自體の自律性の許容さることが明らかとなつてくるのである。

しかもレーデラーに於ては精神的內容の解放、その絶對化（Verabsolutierung）が現代の特質と迄せらるるに至つてゐる⑦。こは彼に於て兩者の關聯の「一層緩き關係」（Beziehung I. seiner Art）の認めらるる⑧事の當然の結果と稱すべきであらう。レーデラーに於ては、社會的關係は文化に對して極めて制約或は束縛された關係にあり、しかも、それは文化の自律性を承認しての交渉である。この點に於て社會的關係の文化規定性は失はれ、それは只單に素材又は條件の提供者たるの地位を有するに止まるのみである。文化は遂にその自己制約性又は自己決定性を承認せらるるに至つた。文化は社會の彼方に存在することとなつたのである。

以上が、レーデラーのマクスウェーバー追憶記念論文集所載の一文「文化社會學の問題」の要點であるが、この文化と社會との分裂、従つて起る文化の自律性の承認に於て、我々はこの際彼の文化の社會學的觀察の齎す次の二つの結果を見逃してはならない。すなはちその一つは、前述の社會學的立場に於ける高田博士或はアドラーの解釋の一轉回としてのレーデラーの立場は、文化の自律性を主張せしことに於て、文化社會學の一つの問題設定の役割をなしてゐることである。この點は更に發展してアルフレッド・ウェーバーの文明と區別せられたる文化の宣揚となり、文化それ自體を極度に迄顯現せんとする迄に至らしめてゐるのである。

第二に、レーデラーの以上の如き把握は、唯物史觀との對極を益々鮮明ならしむることである。唯物史觀に於ては精神的所産としての文化は、その存在は殆んど無視さるると同様の状態にある。しかるにレーデラーは、社會關係の彼方に文化を置くことによつて文化の立場それ自體を擁護し現實的の社會關係そのものとの關係を極めて緩きものとした。この點に於て我々は文化社會學と唯物史觀との關係の對極的な事實を極めて明らかに知りうるのである。一はイデオロギー形態としての文化それ自體の自己決定性を多かれ少なかれと主張せんとする點に於て、他は文化それ自體の從屬性を、更にはその非獨立性を許容せんとすることに於て。かくて我々はこの點に於てこそ、唯物史觀と文化社會學との對極的な關係への一つの手がかりを見出しうるものと思惟せざるをえないのである。

- ① E. Lederer, *Aufgabe einer Kultursociologie*, (Erinnerungs Ausgabe für Max Weber Ed. II, 1928) S. 154.
- ② derselbe, S. 158.
- ③ derselbe, S. 150.
- ④ derselbe, S. 152.
- ⑤ derselbe, S. 158.
- ⑥ derselbe, S. 164.
- ⑦ derselbe, S. 171.
- ⑧ derselbe, S. 161.

(一九三四、一、一五)